名探偵コナン最終回～蘭に俺の本当の声で本当の言葉で～

落ちぶれた天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名探偵コナン最終回～蘭に俺の本当の声で本当の言葉で～

【Ｎコード】
Ｎ４４５８Ｙ

【作者名】
落ちぶれた天使

【あらすじ】
事務所で暇していたコナン。
そこに１本の電話がかかってくる。

プロローグ

プロローグ

俺は高校生探偵工藤新一。迷宮なしの名探偵。そんな俺があるひ幼馴染で同級生の毛利蘭と遊園地にあそびにいって、黒ずくめの男たちの怪しい取引現場をもくげきした。取引を見るのに夢中になっていたおれは背後からちかずいてくるやつらのもうひとりのなかまにきずかなかった。俺はその男にどくやくを飲まされ、目がさめたら体がちじんでしまっていた。組織に工藤新一が生きていると知れたら、また命をねらわれまわりの人間にも危害がおよぶ。はかせの助言でおれは正体をかくすことにし、江戸川コナンとしてらんの家にころがりこんだ。

そして、いまだ組織のしっぽはつかめず、この体になってしまってからもう半年ほどたつ。

「あーあ。あいかわらず依頼がこねえじむしょだぜ。」

コナンが暇そうな顔をしてつぶやいた。いま蘭は園子とスキー旅行。おっちゃんはあさから麻雀をしにいった。

プルルプルル

「ん？電話」

プロローグ（後書き）

はじめまして。落ちぶれた天使です。今回初投稿です♪まだすっごく未熟で下手ですけどよんでくれたらうれしいです♪これからもがんばります

一本の電話（前書き）

こんばんわｗ

一本の電話

電話だ・・・。
コナンハ受話器をとってうけこたえた。

歩美からだった。
どうやらいまいる銀行が強盗にあっているという。

こなんはすぐかけつけ
見事事件をかいけつした。

テレビ局のインタビューをうけているとき
灰原はうっかりフードをかぶるのをわすれていた。

ジンにみられているともしらずに・・・

じんはにかっと笑うと、

あがさていにむかった

そう、さりげない一本の電話のせいで・・・

そのさりげない一本のでんわのせいで

新一のうんめいの歯車がまわりだす・・・・

一本の電話（後書き）

でわまた次回

心の病気（前書き）

こんばんわーｗ

今日、２回目のとうこうです♪かけるだけこれからもかきまーす☆

心の病気

雪がちらちらふるなか、灰原哀はいまの家、つまりあがさ亭にむかっていた。

哀は時計をみると、

『19時32分・・・銀行強盗にあってからそろそろ2じかん半・・・』

と、心の中でささやいた。

しばらく歩いているうちにあがさ亭がみえてきた。

門をあけて家の中に入ろうとすると、うしろから車がはしってくる音がした。

哀は、ふりかえったとき、その場でうごけなくなった。

そう、そこにはジンのポルシェがとまっていたのである・・・。

逃げようとしたときにはもうおそかった。

後ろから、睡眠薬をかがされ、

哀はその場できをうしなってしまった。

たまたまそこに歩美があがさ博士に探偵バッジの電池がきれたので

わたそうとしてとおりかかった。

歩美はやつらにみつかるまえにみをかくした。

そこで、哀がポルシェにのせられつれさられる所を

心臓がとまってしまいそうな思い出みていた。

哀がつれさられたあと、

歩美は、コナンの家にいそいだ。

大粒の涙をぼろぼろこぼしながら、

ただ、ひたすらはしった。

大切な、

友達を、

大好きでしかたない人に

助け出してもらいたくて・・・。

探偵事務所の前にやってきたときは、

もう

涙のせいで、頬がまっかにはれていた。

それでも歩美は友をたすけたいただ一心で、

探偵事務所の階段をかけあがった。

そしておもいっきりドアをあけた。

ちょうどそこにはコナンと蘭がいた。

コナンと蘭はおどろいて、

ただ、ひたすら大粒の涙をながしていた歩美に

「どうしたの！？」

「なにがあったんだ歩美ちゃん！」

と、叫ぶようにいった。

歩美はどうにか事情を伝えようとしたが、

寒さのせいで体はふるえ、

ないていたせいでほおが腫れて

なにも言葉に発せなかった。

ただひたすらなくだけ・・・。

歩美がしゃべりたくても、

しゃべれないのを

蘭はみこして、

あゆみをまかにまねきいれ

肩に毛布をかけ、

涙をふき

あたたかいココアをだした。

１０分ほどたってやっとしゃべれるようになった。

そしてあらためコナンが

「なにがあったんだ？」

とたずねるとさっき目撃したことを、

あゆみははなしだした。

歩美がはなしおわると、

蘭はおおいそぎで警察に連絡し、

コナンはＦＢＩのジョディ先生にれんらくした。

それからジョディ先生が毛利探偵事務所に到着すると

コナンはジョディの車に乗り込んだ

「留守番なんてしてられない。歩美もいく！」

「だめだよ。歩美ちゃん。きけんすぎる！」

「で、でも、哀ちゃん、哀ちゃんは私の友達だもん！」

ひっしさがつたわってくるこの言葉をきいてコナンはにっこり笑うと

「しゃーねーなー。つれてってやるよ。でもついたら歩美は車の中にいんだぞ。」

ついにコナンも歩美のひっしさにみかねてＯＫした。

「うん！」

話がまとまると、コナンと歩美はジョディの車にのりこんだ。

「ジョディ先生。灰原のねーさんが殺された倉庫にいって。あそこがあやしいとおもうんだ。」

コナンは運転席にのりだしていった。

「OK。いいわ。それとそこの子と、あの茶髪の少女。ちゃんとまもってあげるのよ。」

ジョディはいいおわるとにっこりわらってくるまをだした。

それにたいしてコナンは、しんけんなひょうじょうで

「うん。もちろん。」

といった。

~灰原哀がいるところ~

「え?」

哀が目をさました。

『どこよここ・・・？』

哀が起き上がった。そしてふとさっき起こったことを思い出した。

『そう・・・そしきに変なくすりをかがされて・・・』

それからジンの不気味な笑みをおもいだした。

そのとたん、哀は体をふるわせて、ぎゅっと体をすぼめた。

あとでおもいかえしてみると、

気が気じゃなかった。

いずれここにジンがきて殺される・・・・

『わかってたのにね。組織をぬけたじてんでこれくらい・・・わかってたのに・・・』

哀の頬から一粒の大きな水滴がポロリとおちた。

今までのつらさがどんどんおおきなみずのつぶになっておちていく。

お姉ちゃん

みんな

工藤君・・・

『私のせいでみんな殺されちゃう・・・』

そのとき哀は心がすっからかんになった。

自分ではいままで必死にクールにみせていたけれど

私には、むりね・・・・

心の病気（後書き）

こんばんわ～＾＾
今回のは歩美も哀ちゃんも
とても切ない気持ちになるはなしです＾＾
最後の哀ちゃんの言葉は、
哀ちゃんの悲しい心のさけびってことで切なくかきました＾＾
次回はまた哀ちゃんの話です＾＾

灰原哀心身ともにの救出（前書き）

こんばんわーwまたまた投稿♪
今日は徹夜でかこーと思いますw
でわいってみよー☆

灰原哀心身ともにの救出

「ついたわよ。」

ジョディがふるびた倉庫の前で車をとめた。

「ありがとう。ジョディ先生。」

コナンが」そういったとたん、ケータイがなった。

「あ、電話・・・。」

コナンはケータイの通話ボタンをおした。

「もしもし。」

コナンがそうこたえると、ケータイから哀の声がきこえてきた。

「く、工藤くん?」

コナンはどなりちらすくらい大きなこえで

「は、灰原か！？」

と、2秒もたたないうちにこたえた。

それにたいして哀はおちついたようすで、

「ええ。いま、おねえちゃんがころされたそうこの2階に監禁されてるわ。まどからは木がみえる・・・。」

哀はひっしに冷静をよそおった。

心のなかでは恐怖でいっぱいなのをおさえて。

コナンは落ち着いた声になり

「そうか、いまたすけてやっからまってろ。」

といい返事もまたずに電話をきった。

それからコナンはきにのぼると

倉庫の窓をのぞきこんだ。

哀がいることを確認すると、窓をあけろとつたえ

中にはいった。

「大丈夫か？」

コナンは哀をみてたずねた。

哀はしたをむいたまま

「ええ。」

とこたえた。

それからコナンは哀をせおってジョディの車にもどった。

いま組織と鉢合わせにまるのは危険とコナンとジョディが
判断したため、そのまま、倉庫をあとにし、毛利探偵事務所にもどり、
あゆみもふくめ、哀は探偵事務所にしばらくねとまりすることになった。
あゆみももしかしたらやつらに顔をみられていたかもしれないので、
とりあえずコナンのそばにつくことになったのだ。
学校は探偵事務所からかようことになり
歩美の母には、長期間の合宿とつたえられた。
～組織のやつらがいる倉庫～
さっき、コナンたちがあとにした倉庫のかんきんべやのまえには
ジンがたっていた。

「またきえやがったな。シェリー。」

と不適なえみをうかべじんがタバコをふかしている。

「ちっ。どうしやす?あにき。あの女には、例の薬を完成させてもらわなくちゃならねえんですぜ。」

ウォッカがこわばった表情でいった。

「まあそのうちもどってくるさ。あいつのまわりの誰かを殺すっておどせばやつは簡単にこっちにくる。」

ジンがいった。

するとウォッカがにやりと笑みをうかべた。

~毛利探偵事務所~

「だいじょうぶ?さむかったでしょう?」

蘭が3人の肩にもうふをかけ、あたたかいココアをいれた。

歩美はにっこり笑い

「うん！でももう大丈夫だよ」

と、いつもどうりのかわいらしい顔でいった。

一方、哀はうんともすんともいわず、ココアを飲んでいた。

蘭にはどうも、この顔が、とてもかなしげにおもえた。

なにもかもすっからかんになってしまったような、悲しい顔。

そして、一番感じたのは、

苦しみや悲しみを全部じぶんでせおいこんでいるような顔であること・・・。

灰原哀心身ともにの救出（後書き）

えっとへんなとこでおわってすいませんーw

まってるから（前書き）

すいませんっまえのかいとちゅうでおわっちゃったんでさいしょらへんこのまえのつづきかきます。

まってるから

蘭はついに口を開いた。

そしてその優しい目は哀のことをやさしくつつみこんだ。

「なにかあったの？哀ちゃん。」

哀は驚いた様子で

「え？」

と返した。

それから蘭は優しく笑うと、哀をだきしめ、

「大丈夫よ。哀ちゃんはみんなに必要とされてるわ。この世にいなくなっていい人なんていないんだもの。たとえそれがどんな人でも・・・。人は、神様がくれた、ひとつひとつなかみがちがう宝箱。宝物なんだから。」

蘭の優しくて、純粋なその心にふれ哀は、姉の宮野明美のことを思い出した。

哀はすこしだけやさしく微笑んだ。

それから蘭のほうをむくと、

「あなた、いい母親になれるんじゃない。」

とほほえみながらいった。

それをみていたコナンも、やさしく微笑んでいた。

～まってるから～

5月1日

歩美のかわいらしい声が毛利探偵事務所にひびきわたった。

「蘭おねーさーん、おじさーん。学校いってきまーす。」

「いってらっしゃーい。」

蘭もにっこりしてコナン達にてをふった。

3人は探偵事務所をでると学校にむかって歩き出した。

学校について教室に入ると、それぞれ自分の席にむかった。

ふつーに授業をうけると、もう下校時間だった。

今日はなにもないのでたったといえにかえった。歩美は蘭と買い物にでかけていて

哀は散歩。

おっちゃんは浮気調査でふざいだった。

しばらくすると、おっちゃんと蘭と歩美がかえってきた。

だけどいつまでたっても家にもどらなかった。

コナンが哀のケータイに電話をすると

おうとうがあった。

「今どこにいるんだ?」

「組織の倉庫よ。」

「なんでそんなとこに?」

「散歩の途中、ジンにあってね、知り合いを殺されたくなかったら、組織にもどって薬の研究をすすめろって。それで、要求をのんだってわけ。」

「バカヤロォ!なんでそんな要求を!」

「私は、ただ要求をのんだんじゃないわ。とりあえず時間をつくっただけ。あなたがここにくるまできながにまってるから。たのんだわよ。じゃあ。」

そういいのこすと哀はいっぽうてきに電話をきってしまった。

コナンはしばらくかんがえこむと、

「まってろよ！」

というとけーたいをおいた。

まってるから（後書き）

このやつはちょっとつまんないかも・・・でもまあかんべんしてください＞＜

どこにいるの？（前書き）

こんばんわーwさあいってみよーw

どこにいるの？

5月2日

いま、蘭はコナンの追跡めがねをコナンが寝ている間に、もちだし、バッチの発信機をたよりに、

いつまでたってもどらない、哀をさがしていた。

ついに蘭は哀がいる、倉庫にやってきた。

「こ、ここに哀ちゃんがいるのね・・・」

そうつぶやくと、こぶしをぎゅっとにぎりしめた。

そのとき鈍いおとがして、蘭は、きゅうに気が遠くなった。

そしてそのばできをうしなってしまった。

そのすぐ後ろには鉄パイプをもったウォッカと煙草をふかしている、ジンがいた。

『新一、新一！』

蘭が太目をさました。

「どこよここ？」

そこはどこかの森のなかのようだった。

「どーして私がこんなとこに？」

そのとき頭に激痛がはしった。

「いたっ」

園激痛でさっきおこったことを蘭はすべて思い出した。

「そっか。私あのときうしろからなぐられて・・・。と、とにかくこのことをお父さんにっ。」

そういうと蘭はケータイをとりだし事務所にでんわをかけた。

でたのはコナンだった。

「どーしたの。らんねーちゃん。」

「あ、あのね、哀ちゃんが麻になってももどらないからしんぱいになって、コナンくんの追跡メガネで哀ちゃんを、さがしてたの。」

「え!?」

「それでね。急にうしろからなぐられて私、きをうしなっちゃって・・・。」

「それでいまどこにいるの!?」

「どこかのもりよ。でも、どこだかは・・・。」

「だいじょーぶ。ケータイのじーぴーえすですぐそっちにおじさんといくから。じゃあまってててね。」

「ええ。」

そういうと電話が切れた。

そのときふと蘭はおもった。

新一、新一なら哀ちゃんも私もかんたんに・・・

簡単に、

たすけてくれるのに・・・・・

どこ、どこいっちゃったのよ・・・・・！

新一・・・！

本当に、あなたはいまどこにいるの？

なにをして、

何を食べ、

わらってるの？

そして、

もう、会えないの？

あなたはいきてるの？

あなたは私がいなくてさびしい？

私はさびしいよ。

ないてもないても

とてもおさえきれないぐらいに・・・

新一・・・・

私はあなたのこと大好きだよ・・・？

あなたのことは

忘れられない。

ぜったいに・・・。

まってるからね・・・

まってる・・・・

まってるよ・・・

蘭が静かにめをとじた・・・。

どこにいるの？（後書き）

このはなしは蘭ちゃんの苦しみがつたわってくるようかきました。
これからもがんばろーとおもいますｗでわｗ

灰原心（前書き）

こんばんわんwさっそくいってみまーすw

灰原心

「蘭ねーちゃん。蘭ねーちゃん。」

「え？」

「やっと目がさめたんだね。よかった。僕お医者さんよんでくるー」

「え、コナンくん。」

そういうと、コナンは病室をでていった。

どうやらここは病院みたい・・・

蘭はまだきりきりと傷む頭をおさえおきあがった。

「いたッ。私、いつのまにかねちゃったみたい。」

コナンが医者をつれふたたび病室にはいってきた。

「もう大丈夫でしょう。これなら、明日には退院できますよ。」

医者が言った言葉に小五郎は目の色をかえ

「らーん。本当によかったっ！」

とらんにだきついた。

コナンもほっとした様子で、蘭をみていた。

～そのころ哀は～

こんなくらくてケータイとパソコンと食料と実験道具しかないんなんて

いやね。

たまにかかってくるジンからの電話は、

薬の開発をいそげってことばっか。

工藤くんもぜんぜん電話してこないところをみると

まだなにもしんてんしてないのね・・・。

たく、あのホームズ気取りの名探偵さんはいったいなにやってんのよ・・・。

はやくてがかりつかんでこんなうすっきみわるいとこから

開放してよね。

たく・・・。

灰原心（後書き）

きょうみじかくてすいませんっ

つぎながくかくんで。でわｗ

正体（前書き）

今回もいってみよーW

正体

学校の帰り道・・・

「おい、今日、博士んちでげーむやろうぜ。」

元太がにこにこしながらいった。

それにたいしてみつひこと歩美もにっこりしながら

「いいですね～」

「やろやろ～」

といった。

よこでコナンもやさしくわらいながらみまもっていた。

ピリリピリリ・・・

コナンのケータイがなった。

ジョディ先生からだった。

コナンはケータイの通話ボタンをおすと、

「どうしたの？」

ときいた。

「ちょうど授業がおわったころかしら？」

「うん。で、どうしたの？」

「ちょっとクールキッドに話したいことがあってね。今、あがささんの家にいるからきてくれる？」

「いいんだけど、あいつらもいっしょでいい？歩美ちゃんは帰るばしょがいっしょだし、あいつら、いまから博士んちでゲームやるっ

てはっしゃいでて。」

「いいわ。かえったら、研究室にきてくれる？」

「わかった。じゃあまたあとでね。ジョディ先生。」

コナンはそういうと電話をきった。

ジョディと電話しているうちにもうアガサ博士んちのめのまえにきていた。

中に入ると、歩美たちは

「ゲームやろう。」

「やいば2やろうぜ。」

「みんなでやりましょう。」

といってゲームをしだした。

コナンはらんどせるをおくと地下室におりていった。

あとからはかせもおりていった。

ちかしつのとびらをあけると、ジョディがまっていた。

「で、なにがあったの？組織のことなんでしょ。」

「ええ。まあ。昨日、水梨玲奈から電話があってね。」

「どんな電話なんじゃ？」

「ジンが、ある死んだはずの人物をロンドンでみたって。それで組織は今園人物をさがしてるって。
だからきをつけてって。」

「まさかそのじんぶつって・・・」

「高校生探偵の工藤新一よ。」

「かーぜんぶおれのせえじゃんかー」

「どういうこと?」

コナンは事情をすべて話した。

「へえ。そうだったの。」

正体（後書き）

続く・・・・

江戸川コナン誘拐事件（前書き）

今日のははらはらどきどきです☆

ジョディ「やっぱりそうだったのね。」

コナン「え？」

コナンが不思議そうにジョディにいった。

ジョディ「だって、どうかんがえたって、小学一年生の頭脳じゃないもの。私たちもこしてるし。」

コナン「へへへへへ・・・」

コナンがごまかすようにわらった。

ジョディ「じゃあ私はかえるわね。みんなにこっそり護衛をつける準備をしなくちゃいけないから。」

「もちろん君にはわたしが・・・」

ジョディがそういいかけたとき、コナンは笑いながらいった。

コナン「ぼくはいいよ。」

ジョディ「え、なんで!?いちばん危険なのはクールキッド、あなたなのよ!」

コナン「護衛なんてつけたら、逆に正体ばれちゃうよ。」

ジョディはすこし不満そうな顔をしてあがさ邸をでた。

それにつづき、コナン達も家をでた。

歩美「コナンくんバイバーイ」

コナン「おう」

そういうとコナンはひとりになった。

そのあとコナンは工藤邸にはいった。

コナン「とりあえず、掃除すっか。ずっと、俺の部屋とか掃除してねえし。」

そういうと、コナンは掃除機をかけはじめた。

ーそのころ組織ではー

ジン「工藤新一・・・。まだみつからねえか？」

ジンがウォッカにたずねた。

ウォッカ「へい・・・まだ・・・」

ウォッカがそういうとジンがたちあがった。

ジン「工藤邸だ。工藤邸にいくぞ。」

ジンがそういうと、ウォッカはにんまりとして車をだした。

ジンとウォッカがそうこをでていくと、

隣のへやで、ききみみをたてていた、哀はうごけなくなった。

それから哀はケータイに震える手で、

今あった出来事を入力して、メールをおくった。

倉庫から工藤邸までは１０分かからない。いまメールを打つのに、
７分はかかってしまった。

ーそのころ工藤邸ではー

コナン「ん、メール？げ、灰原からだ。」

コナンはそういうと、ケータイをてにとり、メールをみた。

メールを見たとたん、コナンは青ざめて、まどのそとをみた。

ジンのポルシェがこっちにむかってはしってきている。

コナンはあせると、

コナン「やっべえ。」

といって、工藤ていをでて、スケボーをとばした。

もちろん、工藤邸から、スケボーを、あんな華麗にのりこなす、子供がでてくるのをみのがしはしない。

ジンは車でコナンを追いかけた。

ジン「小僧をうて！」

ジンがそういうと、ウォッカは窓から銃をだし、コナンをそげきしようとした。

だが、コナンはそれを軽々かわした。

そのときだ。

コナンのスケボーの車輪がうたれた。

コナンは当然ころげおちた。

ジンの車のうしろから、

もう一台車がでてきて、窓からは銃をつきだしている。

そこから顔をのぞかせているのは、

キャンティだった。

コナンが落ちたのを見たジンは車をとめ、

コナンの肩をそげきした。

痛みでコナンはその場からうごけなかった。

ジン「きていたのか、キャンティ。」

キャンティ「ああ。」

そう言葉を交わすと、ジンとウォッカはコナンにゆっくり近づいた。

コナンはまだ痛みでうごけなかった。

そこにやってきた二人はコナンの腹を足でけった。

コナンは気を失った。

気を失ったコナンを見ながら、ジンがいった。

ジン「こいつを組織の地下の監禁部屋にぶち込んどけ。あとで、尋問していろいろはかせる。」

ウォッカ「へい。あにき。」

そういうと、ウォッカが車の後部座席にコナンをほうりこんだ。

ジンも車にもどろうとしたとき、

ジンは、じっとみつめるような視線をかんじた。

ふりむくと誰もいなかったのでジンは目的ははたせたし、まあよしとしようと、くるまにのって

キャンティや、ウォッカとともに工藤邸のまえをはしりさった。

そのとき、視線をはなっていたのは、歩美達だった。

3人はもうぼろぼろ涙をながしていた。

歩美「コ、コナン君・・・」

光彦「と、とりあえず、け、警察に電話しましょう・・・。」

元太「お、おう・・・」

そういうと光彦はケータイをてにとって、震える手でボタンをおした。

警視庁「はい。こちら、警視庁司令室。」

光彦「あ、あの、めぐれ警部おねがいします。」

めぐれ「はい。めぐれ。」

光彦「め、めぐれ警部・・」

めぐれ「おお。光彦君。どうしたんだい?」

光彦「じ、じつは、コ、コナン君が、銃でうたれて、ゆうかいされたんです!」

めぐれ「なにー?それは本当なのかねっ」

光彦「本当にきまってるでしょう!」

めぐれ「で、君たちはいまどこにいるのかね?」

光彦「あがさ博士の家のまえです・・・」

めぐれ「わかった。すぐいくから君たちはあがささんの家でまってなさい。」

光彦「はぃ・・・」

そういうと電話は」きれた。

光彦たちはとぼとぼ泣きながらあがさ博士の家に入っていった。

江戸川コナン誘拐事件（後書き）

でわまたｗ

江戸川コナン誘拐事件？（前書き）

さあいってみよー

江戸川コナン誘拐事件？

ー15分後ー

ピンポーン

あがさ「はーい」

めぐれ「子供たちは？」

あがさ「一応あったことは話してくれたんじゃが、なきやまなくってのお。」

佐藤「無理もないわ。目の前で友達が撃たれたんだから。」

そういうと、あがさ、めぐれ、高木、佐藤、白鳥は、歩美たちのとこまでやってきた。

あがさ「ほれ。けいぶさんたちがきてくれたぞ。」

げんた「めぐれ・・・警部」

めぐれ「なにがあったか、はなしてくれるかい？」

歩美「う、うん・・。」

光彦「ぼくたち、とちゅうまで、かえったんですけど・・」

元太「おれが、はかせんちにわすれもんしちまったことおもいだしてよお・・」

歩美「それを、私たち、はかせんちにとりにいこうっておもって、はかせんちにもどろうとして、」

「はかせんちのまえのまがりかどまできたら」

光彦「コナンくんが黒い車においかけられてるみたいで怖い顔をして、スケボーをとばしてたんです・・」

元太「俺たち、ひかれそうになっちまってよう、でんちゅうばしらにくっついたんだよ。

歩美「そしたら、その黒い車、まどから銃をだして、コナン君をう

とうとしたの。」

元太「そのときはまだ弾あたんなかったんだけどよう・・・」

光彦「いきなり、後ろからもういちだいくるまがでてきて」

歩美「そのくるまにのってたひとが、まどから、銃をだしてね、コナン君のスケボーの車輪と、」

「コナン君の肩をうったのよ・・・」

元太「そしたらよ、黒い車にのってた、やつらがでてきて、コナンの腹、けったんだよ!」

光彦「そしたらコナン君、きをうしなっちゃったみたいで・・・」

歩美「歩美、こわくて、目ふさいでたんだけど、黒い服着た人たちが、、」

「組織の、地下室に、ぶちこんどけーとか、尋問して、いろいろ吐かせるとかいってたの・・・。」

めぐれたちは、スケールのすごさにおどろきをかくせないでいた。

千葉「けいぶー。ちょっといったところに、コナン君のスケボーがおちてました。」

そのスケボーは見事に車輪をうちぬかれていた。

めぐれ「かんしきいそげ！」
「私達は今日はこれで失礼します。子供たちもつかれているでしょうし・・・。では。」

そういうとめぐれたちはあがさ邸をでていった。

ーそのころのコナンー

コナン「ん、おれきぜつしてたのか？」

コナンがおきあがった。まだはらがきりきりいたんだ。

コナン「どこだ？ここ？」

どこか狭い地下室のようだった。その瞬間、コナンはさっきおこったことをおもいだした。

体はさいわいしばられていなかった。

ジン「おめざめか？工藤新一？」

うしろからジンのこえがした。

ふりむくとジンとウォッカがいた。

江戸川コナン誘拐事件？（後書き）

つづくのだ・・・w

江戸川コナン監禁事件（前書き）

タイトル、誘拐から、監禁にかわったぞよ☆

コナン「ジン、ウォッカ!?」

コナンがおどろくようにいった。

コナン「クソッてことはここは組織の!?」

ジン「ご名答・・・。まさかガキの姿になっていきてるとはな・・・」

コナン「灰原は?シェリーはどうした!?」

ジン「やつなら、違う倉庫でベルモットといる・・・まあ、じきにここへくるだろうが・・・。」

コナン「で?俺をどうするつもりだ!?」

ジン「さあな・・・。まずはお前の身体検査からだ・・・ウォッカ!」

ウォッカ「へい兄貴！」

そういうとウォッカはコナンの体を調べ始めた。

そしてケータイ2つと、探偵団バッチをコナンからうばった。

ジン「まあ、しばらくお前にはここでじっとしといてもらう。もうすぐベルモットとシェリーがここにくる。」
「それまで念仏でもとなえておくんだな。」

ジンがそういうと、ウォッカがコナンの体をきつくロープでしばった。

コナンをしばりあげたあと、2人は地下室をでていった。

江戸川コナン監禁事件（後書き）

やほーｗアクセス数なう♪

江戸川コナン監禁事件？（前書き）

アクセス数やばっｗみなさんのおかげでぷ♪
これからもがんばるなう♪

ー組織の地下室ー

コナンはとりあえずベルモットをまつことにした。

地下室は狭くてくらく、灰原の気持ちがわかったきがした。

コナン「（おっせえなあ、ベルモットと灰原。あれ？でもなんで灰原までくるんだ？）」

そんなことを考えているうちに、地下室の扉があいた。

ベルモットが入ってきた。

コナン「あれ、灰原は？」

ベルモット「シェリーなら上の研究室、ここにしかない、資料をみてるわ。」

コナン「だからあいつもきたのか・・・。」

ベルモット「私はあのコのみはりと、キャンティとコルンがかえってくるまでのただの見張り役よ?」

コナン「キャンティとコルン?奴等もここにくんのか!?」

ベルモット「ええ。そうよ?驚いた?私のいとしのシルバーブレッド君?」

コナン「あいつらスナイパーだろ?なんで、俺のみはりなんかに?」

ベルモット「いろいろあってねえ。組織で人の手配がまにあってないのよ。」

「それにあなたにいろいろ聞きたいことがあるみたいよ・・・?」

コナン「聞きたいこと?」

ベルモット「それとね、私がわざわざここにきたのにはもうひとつ理由があるわ・・・」

コナン「理由?」

ベルモット「ジンからの命令であなたなにしでかすかわからないからって、睡眠薬をのませろっていわれてね。」

そういうとベルモットはポケットから麻酔薬をとりだしてコナンに麻酔薬をさしだしながら、

ベルモット「飲む？」

ときいた。とうぜんこなんも

コナン「んなもんのむわけねえだろ」

とかえした。

そのときベルモットがコナンのあごをつかみむりやり睡眠薬をコナンのくちにおしこんだ。

コナンがねむったのを確認すると、ベルモットはさっていった。

江戸川コナン監禁事件？（後書き）

身じｋｚくたすんませんなう・・・＞＜

江戸川コナン監禁事件？（前書き）

昨日みじかくてすいませんなう！！！

今日はばりばりがんばるなう！！！

キャンティ「これがあの工藤新一？」

キャンティの声がきこえてきた。

コナンはゆっくりと目をあけた。

そこにはもうベルモットの姿はなくかわりにキャンティとコルンがめんどくさそうにたっていた。

キャンティ「おめざめのようだね名探偵？」

コナン「キャンティ、コルン！」

キャンティ「あら、あたいらのこともけっこうつかんでるようだね！」

コルン「おれ、狩りにいきたい・・・」

キャンティ「あんたはだまってな！！これもあの方の命令さ」

コルン「あの方・・・わかった・・・」

コナンはまだくらくらする頭をおさえながらおきあがった。

知らないうちにロープはきれていた。

キャンティ「さあはいてもらおうか、あんたの体がちじんだことをしっている人物を?」

そういうとキャンティはコナンの頭に銃をおしつけた。

コナン「そんなやつ、いないさ」

コナンはあわてることもなく、平気な顔をしながら、こたえた。

それにキャンティはすこしばかりきれたらしく、

舌打ちするとコナンをけとばした。

それからもコナンはいっさいこたえなかった。

おかげでけられたりなげとばされたり銃で足をかすめられたり全身ぼろぼろになった。

しばらくしてからキャンティは１０分後またはなしをきくといってそとにでていった。

コナンはこのチャンスをのがしわしなかった。

へやにあったちいさな換気口からコナンはそとにでた。

コナン「ふーとりあえずだしゅつしたはいいけどこれからどうすんだ？」

「ケータイとられちまったし・・・。とりあえず交番にかけこむか！」

コナンはそういうとところどころいたむところをがまんしながら交番にやってきた。

ー博士と少年探偵団ー

プルルルプルルル

博士のうちの電話が鳴った。

少年探偵団はいっきに電話に注目した。

あがさ「もしもしあがさです。」

めぐれ「おおあがささん！コナンくんがほごされた。いま警察病院で手当をうけている。」

「悪いがすぐきてくれんか？」

あがさ「ほんとか！？よかったよかった。いますぐ子供たちをつれて病院にいきます！！！」

そういうと電話がきれた。

あがさ「みんな！！コナンくんがみつかったぞ！」

歩美「ほんと！？」

光彦「ほんとですか！？」

げんた「まじかよ！？」

あがさ「ああ。いま警察病院で手当をうけているそうじゃ。きみらもいくかね？」

歩美「いくいく！！！」

光彦「いきます！！！」

げんた「いくにきまってんだろ！！！」

そういうとあがさはかせたちは警察病院にやってきた。」

がらがら

病室のどあがひらいた。

歩美「コナンくん！！！」

光彦「ぶじだったんですね！？」

げんた「コナン～！」

コナン「おまえら！」

コナンは頭とかたに包帯をまいていた。

江戸川コナン監禁事件？（後書き）

今日もちょっとみじかい？なう！

疑い（前書き）

今日2回目なう♪

めぐれ「さっそくだがコナンくん。なにがあったかはなしてくれるかね。」

コナン「うん。僕、つれさられたあと、変な工場の地下室にきずいたら監禁されてたんだ。」
「それで、誘拐犯がいなくなったときにちいさな換気口から脱出したんだ。」

めぐれ「歩美君たちが、君をつれさるさい、誘拐犯が尋問するとかいってたらしいが、」
「尋問されたのかい？」

コナン「あ、えと・・・・・だ、大丈夫！さ、されてないよ！へへへ・・・」

コナンは苦笑いをした。

そんなコナンを一同は唖然とした顔でみた。

コナン「え・・・？」

元太「コナン・・・おめえほんと嘘つくのへただな・・・」

コナン「え、う、嘘じゃないよ～やだなもう元太ったら・・・ははは～」

光彦「幼稚園児がみたって一発でわかりますよ・・・嘘だって・・・。」

歩美「コナンくん・・・。」

佐藤「コナンくん。本当のことはなしてくれるかしら?」

コナン「あ～いや、その・・・へへへ・・・」

高木「コナン君・・・。」

コナン「う、嘘なんて僕がつくわけないじゃない?」

歩美「もうあきらめなよ～」

元太「そうだぞコナン！」

佐藤「それとも、いえない理由でもあるのかしら・・・？」

コナン「え・・・」

高木「そうなのかい？コナンくん。」

光彦「そうなんですね！」

コナン「な、何いってんだよ～みんなして～俺がうそつくようにみえるか～？」

一同は声をそろえていった

『みえる！！！！！！！』

コナンはあきらめたようにため息をついた。

コナン「はぁ～。」

そっれからコナンは子供のような顔をすると、

コナン「はなさなくちゃ、だめ?」

ときいた。

また一同はこえをそろえてきっぱりと

『だ~め!!!』

といった。

コナンはもう一度ため息をつくと小さい声でいった。

コナン「されたよ?これだけじゃ・・・だめ?」

光彦「だめです!!!それだけじゃなんで誘拐犯がコナン君をさらったか分からないでしょう!!!」

佐藤「そうよ。コナン君、もっとくわしくおしえてくれるかしら。」

コナン「じ、実はわすれちゃったんだ！ほら、僕こどもだから！！！」

また一同が唖然するなか、あがさはかせが苦笑いしながらコナンをかばった。

あがさ「ま、まあコナン君もつかれてることじゃろうし、事情聴取は、また今度ってことでどうじゃ！？」

めぐれ「そ、そうだな。じゃあまた後日事情聴取をするとしよう。」

一応一同は納得したとみえたが、まだ納得していなかったものもいた。

佐藤「なんか、あのあわて方、なんかありそうじゃない？」

高木「はい・・・。ちょっとオーバーすぎますよね・・・。」

佐藤「ねえ、高木くん。コナン君の過去について、調べてくれない？」

「私は、コナン君の戸籍調べるから。」

佐藤「あ、はぃ！わかりました！」

そういうと二人は病室をでていった。

一方、少年探偵団もコナンのことをふしんにおもっていた。

歩美「ぜったい、コナン君、なにかあるよね！」

光彦「はい！なにかあるにちがいません！」

元太「でもそれをどーやってききだすんだよっ」

光彦「ぼくにいい方法があります！」

そういうと光彦はおもちゃの手錠をだした。

歩美「で、でも、それはちょっとコナン君があかわいそうよ。」

元太「でもよ。逆にあいつのためになんじゃねえか？」

光彦「そうですよ！」

歩美「そ、そうよね・・・！」」

あがさ「君たち、かえるぞ。」

歩美「私達、もうちょっとコナン君とおはなししてく！」

光彦「だから博士はさきにかえっててください！」

あがさ「そうか。くらくならないうちにかえるんじゃよ。」

そういうとあがさは病室をでていった。

それと同時にめぐれも病室をでていった。

そしてびょうしつはコナンと少年探偵団だけになった。

すると光彦はコナンにかけよって

光彦「ごめんなさい！！！」

といってコナンの片手におもちゃの手錠をかけもう片方をベットのはしにくくりつけた。

コナン「ええ、ちょっと！！！なに！！！」

とあわてた。

そしてもう片方のてには　元太と歩美がかけより

反対側のてと同じように手におもちゃの手錠をかけもう片方をべっとのはしにくくりつけた。

歩美「ごめんねコナン君！！！」

コナンは両手がふさがれた。おもちゃだからといって、そう簡単にははずれない。

コナン「お、おい！なんだよこれ！」

コナンははずそうとして手錠をひっぱった。

光彦「コナン君、本当のことをはなしてください！！！」

歩美「おねがいコナン君！！！」

げんた「おれら友達だろ！！！」

コナン「だからなにもかくしてないって。」

コナンはまだ手錠をはずそうとしながらいった。

歩美「おねがいだよコナン君・・・私達、コナン君のこと、しんぱいで・・・」

光彦「灰原さんも、さらわれちゃいましたし・・・」

げんた「おれら、友達がつぎつぎにさらわれて、心配なんだよ・・・」

3人のめは涙ぐんでいた。

コナンはわらうといった。

コナン「わかった。はなしてやる。」

歩美「じゃあ！」

コナン「でもいまはまってくれねーか？」

光彦「え？」

コナン「時がきたら、お前らにはすべてはなしてやるから、その時までもうすこし、」
「まってくれねーか？」

コナンの意味ありげな言葉に、少年探偵団一同はにっこりし、

光彦「はい！」

歩美「うん！」

げんた「ぜったいだぞ！」

とつぎつぎにいった。

それからコナンは苦笑いをすると、

コナン「それと、この手錠はずしてくれねーか？」

といった。

光彦たちはうなずくとコナンの手錠をはずした。

ーそのころジンたちはー

ジン「ガキはどこにいった？」

ウォッカ「この換気口から、にげたみたいですぜあにき。」

ジン「おもしろいじゃねーか。キャンティ、コルン、あのガキをすぐにつかまえてここにつれてこい！！！」

ジンがいった。

キャンティ「あいよ。」

コルン「つかまえる・・・分かった・・・。」

そういうと2人は勢いよくでていった。

ーそのころの佐藤、高木ー

佐藤「た、高木くん・・・」

高木「はい、佐藤さん」

佐藤「ないのよ、コナン君の戸籍が・・・」

高木「ええ！！じゃ、じゃあコナン君は、いったい何者なんだ！？」

佐藤「海外の戸籍もしらべたけど、江戸川コナンなんて人間、この世に存在しないわ！」

高木「僕のほうでも、コナン君のたんていじむしょにあらわれるまでの過去をさぐってみたんですが、いっさい、探偵事務所にあらわれるまで、目撃されてないんです！」

佐藤「いったいどうして！？」

高木「それと、コナン君が現れた日から、姿をけして、おとさたない人物がいるンです。」

佐藤「え？」

高木「工藤くんですよ！」

佐藤「まさか・・・。高木君！すぐにコナン君の指紋と工藤君の指紋をしょうごうして！」

高木「え！？」

佐藤「はやく！！！」

疑い（後書き）

今回おもしろくなかったなう・・・

佐藤と高木（前書き）

やほーwめちゃめちゃ腹いたなう！！！

佐藤と高木

高木「はは・・・こんなことって・・・」

高木刑事はコナンの指紋と新一の指紋を照合した結果をみながら冷や汗をたらしていた。

高木「し、指紋が、い、一致してる・・・!?」

佐藤「どうだった?高木君」

高木「そ、それが」

佐藤「一致したのね・・・まさかとは思ったけど・・・」

高木「はい・・・」

佐藤「でもどうしてあんな姿に?しかもどうして正体をかくしているのかしら・・・?」

高木「ですよね・・・・」

佐藤「やっぱコナン君に直接きくしかないわね・・・・」

ーそのころコナンはー

コナン「（しかしこれからどうすっかー？俺が気づいたらいなくなってんだ。組織の奴等もこれこそ血眼になって俺をさがすだろーしな・・・それに、なんか佐藤刑事俺のことあやしんでたような気がすんだよなー。こりゃ、いろいろ大変になってきたなー・・・」

コナンはベッドに横たわりながらボーっとしていた。

次第にコナンはねむくなり、そのまま眠りについた。

ーそのころキャンティとコルンはー

キャンティ「たく、いったいあのガキどこにいったんだい？」

コルン「あいつの・・・家には・・・いなかった・・・」

キャンティ「となると病院だが、どうせいるとしたら警察病院だね・

・・。となるとやっかいだよ。」
「近くにサツがいる可能性がたかいね・・・簡単につれだせないよ！」

コルン「うん・・・・とりあえず、ジンに・・・連絡・・・」

キャンティ「ああ。そうだね。」

佐藤と高木（後書き）

みじかっなう！！！

復活！東の名探偵（前書き）

やほーなう

ジン「やはり、家にはもどってないか・・・」

キャンティ「ああ。どうせ警察病院だろうよ。」

ジン「じゃあお前らとほかのメンバーであいつの家のまわりや通りそうなとこをはっておけ。」

「けがといってもあれはたいしたけがじゃねえ。すぐにでてくるだろう」

キャンティ「あいよ。ジン」

ー一方コナンの病室ではー

いしゃ「うん、これだったら明日にでも退院できるでしょう」

蘭「ほんとですか！よかったねコナン君！」

コナン「うん！」

蘭「じゃあ明日の朝むかえにくるから、、今日はお姉ちゃん、かえるね」

コナン「うん！」

そういうと蘭は病室をでていった。

コナンはそのまま考え込んだ。

コナン「（さてどーすっか・・・俺のみのまわりで奴等がはってかもしれねーし、俺が退院したとわかったらすぐ行動にでるだろーし・・・まったく、どーすりゃいいんだよ・・・ま、とりあえずあさっての学校の帰りにでもはかせんちによってくか・・・）」

コナンはかんがえているうちに深い眠りについた・・・。

ー翌日ー

コナン達はめでたく退院して探偵事務所にいた。

蘭「コナンくーん、晩御飯なにがいい？」

コナン「なんでもいいよー」

コナンは必死に子供のようにふるまった。

それから1時間くらいすると、

晩御飯がでてきた。

蘭「明日はコナン君、学校だね～」

コナン「うん」

蘭「また誘拐なんてされちゃだめよ？ちゃんとコナン君が帰ってこられるように、ある人たちにおねがいしたから♪」

コナン「ある、人たち？」

コナンは顔をしかめた。

蘭「少年探偵団のみんなよ～」

コナン「え!?」

蘭「歩美ちゃんがね、コナン君が入院してるあいだに自分のうちにかえったじゃない?そのかえりぎわに、しばらく帰るときはコナン君をここまでおくりととげてくれるって」

コナン「まじ!?」

「（あいつら、余計」なことを～）」

蘭「ほら、ご飯たべおわったらはやくねなさい、明日の準備してね」

コナン「はーい」

コナンはそういうとリビングをでて布団にもぐった。

復活！東の名探偵（後書き）

うぷ

はりきった探偵団（前書き）

今日はさいしょのころげんためせんやねん

はりきった探偵団

じりりりり

目覚まし時計がはげしくなった。

コナン「朝か・・・」

コナンは眠そうな顔でおきあがる。

コナン「ふあああああ。」

コナンはあくびをするとリビングにでていった。

コナン「おはよう、蘭ねーちゃん。」

蘭「おはよう、コナン君、ご飯にしよっか。」

コナン「うん。」

小五郎「ふあああああ」

蘭「あ、お父さん、今日、空手部でおそくなるから、夜ご飯はポアロで食べてね～」

小五郎「へいへい・・・」

蘭「コナン君も寄り道しないでかえってくるのよ。」

コナン「はーい」

コナン達はもくもくと朝食を口にした。

それからコナンは家をでた。

歩美「おはよう、コナン君！」

光彦「おはようございます！」

元太「よう！コナン！」

コナン「よおおめえら。」

歩美「哀ちゃんもおはよう！」

哀「おはよう」

歩美「コナン君も蘭お姉さんからきいてるとおもうけど、」

光彦「しばらく僕たちが」

げんた「お前を家までおくってやんよ！なずけて・・・」

３にんそろって『コナン君をまもり隊！！！！』

コナンは苦笑いをした

はりきった探偵団（後書き）

むふふ

不審者事件（前書き）

うわ～～～～wwww

そうこうしているうちに、学校についていた。

女子一同『コナンく～ん！！！』

コナンが教室にはいると、クラスの女子が一気にコナンの元へ、かけよった。

女子Ａ「元気にしてたぁ？」

女子Ｂ「風邪？」

女子Ｃ「だいじょうぶ？」

女子Ｄ「ちょっと、みんなおさないでよ！私がコナン君とお話するのっ！！！」

女子Ｅ「私よ！！！」

女子Ｆ「あたしだもんっ！！」

歩美「ちがうわ！コナン君は歩美の将来のお婿さんだもん！！！」

コナン「え、ちょ！」

コナンの取り合いで扉が混雑した。

コナンは成績学校トップで、運動神経がよくてサッカーもプロ並み。

そのうえ、きれいな顔立ちで、かっこいいときたら女子もだまっちゃいない。

ほかの学年や、ほかのクラスの女子までできていた。

それをみている、男子はもちろんいい気分ではない。

ひそかに嫉妬しながら、机に座っていた。

コナンはそれをなんとかふりはらうと、おおきいなため息をついた。

コナン「やってらんねぇぜ・・・。」

灰原「あら、組織に勝手に誘拐されといて。誘拐しにいったことをしらせた私にはなんも礼はないのかしら？」

コナン「んなこといったってよぉ・・・。て、え・・・？」

灰原「なに？」

コナン「ええええええええええええええええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

灰原「なんなのよ、いきなり叫んだりして。」

コナン「な、な、なんでオメーがここにいんだよ！？」

灰原「ああ。あなたにはいってなかったわね。あのあと、ベルモットがにがしてくれたのよ。まあ、正確にゆうと、川におとされた。

ってほうがただしいかしら？」

コナン「ベルモットが？んなことしたことばれたらあいつころされちまうだろ！？」

灰原「さあ？どうかしらね。彼女はあなたのことときにいってるみたいだし。」

コナン「それよりお前、こんなとこにいてだいじょぶなのかよ？」

灰原「どうかしら？でもしいてゆうならより危険なのはあなたね。警察に親密な関係をもたない私とちがって、あなたが警察と親密な関係であることは明白。となると私よりまずはあなたのことを組織は優先するでしょうから？せいぜい気をつけるのね。」

コナン「あ、ああ・・・。」

小林「は～い。みんな授業はじめますよ～。」

一同『は～い』

コナン「（たく、こんな中じゃ考えられもしねえよ・・・）」

小林「小島く～ん。３＋８は？」

げんた「えっと、えっとねえ・・・１０！！」

小林「おしい～！！！じゃあ円谷くんはとけるかな～？」

光彦「もちろんです！答えは１１です！！！」

小林「せいかいっ！」

放送『緊急放送、緊急放送、１階の図書室で水漏れ事故が発生しました。児童は教室と窓の鍵をしめ、担任の指示に従って行動しなさい。避難訓練ではありません。くりかえします・・・』

小林「みんな！教室のドアとまどをしめて！はやく！」

児童Ａ「きゃー！」

光彦「確か、水漏れ事故って、不審者が侵入したって意味ですよね・・・？」

歩美「う、うそぉ・・・」

げんた「まじかよお・・・」

小林「みんな、おちついて！私のほうにきなさい！」

灰原「なんか大変なことになったわね・・・。」

コナン「ほんと。世の中事件がたえねーなー。」

歩美「二人とも・・・」

光彦「おちつきすぎです・・・」

コナン「まぁ銀行強盗やら何回かやりあってっから。それに、ガキのころこーゆーこと一回あったし。」

元太「ガキのころ?なにいってんだオメー。」

光彦「いまだって、がきじゃないですか。」

歩美「うんうん。」

コナン「ま、まあいいじゃねーか・・・ははは」

灰原「まあ、とりあえず現場待機しかないわね」

東尾マリア「あ、ドアの向こうに変な人がおんで!」

小林「きっと例の不審者だわ!みんな、さがって!」

灰原「で、どうするの?」

コナン「キック力増強シューズはねえけど麻酔張りはあっからうちこむ」

そういうとコナンは不審者にちかずくと麻酔張りをうちこんだ。

不審者はそのままねむってしまった。

そこへ、警察が到着し、不審者はお縄についた。

不審者事件（後書き）

ううううううううううううううううううううううううううううう

うううううううううううウウウウウウウうううううううううううう

ううううううううううううううううううううううう

はじまちゃったね・・・（前書き）

ウああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

はじまちゃったね・・・

不審者騒ぎのせいでその日の学校はなくなった。

俺たち少年探偵団は歩美たちに無理やり?つき合わされ、博士の家で、こういう場合の対策を考えることになった。

今はその博士のうち。

もう日が暮れるころ。

5時半。

コナン「おい、オメーらそろそろかえったほうがいいんじゃねーか?」

光彦「そうですね。もう日も暮れてきましたし。」

ピンポーン

光彦がそういいかけたときだった。

博士の家のチャイムがなった。

博士はだれじゃ?という顔をしながら玄関にむかった。

ドサッ

いやな音が玄関のほうからした。

それとどうじに、博士のうめき声も。

博士「うわっ！！！」

コナン「博士！？」

歩美「な、なにがあったの？」

コナンは急いで玄関にむかった。

そこにはみたくもない光景がひろがっていた。

なぐられて気をうしなってる博士。

その目の前には拳銃をもったジンとウォッカ。

コナン「ジン・・・ウォッカ・・・」

哀「うそ・・・」

灰原はその場でしゃがみこんだ。

玄関に駆けつけた歩美や光彦やげんたもいい状況でないことはわかった。

光彦「は、かせ？」

げんた「だ、だれだよオメーら・・・？」

コナン「おめえらはさがってろ!!」

コナンがさけんだ。

だが、歩美達はなぜか恐怖でうごけなかった。

そのときサイレンサーつきの拳銃が火花をちらした。

同時にコナンは足に激痛を感じた。

そのままコナンは倒れこんだ。

そう、コナンの足がジンが打った弾をあびたのだ。

弾は貫通したが、おぞましいほどに血がでてきて、身動きが取れない。

歩美「コナンくん!!!!!」

歩美はそういうとコナンにかけよって、コナンに話しかけた。

歩美「だ、大丈夫?」

コナン「あ、あぁ。これくらいじゃ死なねーよ・・・」

そういいながらもコナンは苦痛で眉をしかめる。

その後、げんたと光彦もコナンにかけよってジンたちにいった。

光彦「なんなんですか!?あなたたち!?いきなりうったりして!

！！」

ウォッカ「だまってそのメガネのガキとシェリーをわたせ！」

歩美「しぇ、シェリー？」

げんた「だれだ？」

光彦「とにかく、コナン君は渡しません！！！」

ウォッカ「いまなら、そのガキを渡すだけでオメーらをみのがしてやるぜ？」

光彦「いやです！！！」

コナン「み、光彦、に、にげろ！」

歩美「じゃあコナン君のかわりに歩美がいくからコナン君を病院につれてって！」

ウォッカ「そんなのが聞けるとでもおもってんのかよ？」

そんな中、なきそうな顔をした探偵団たちとは裏腹に、

コナンはかくごをきめたような顔をした。

コナン「大丈夫。この人達俺の知ってる人だから。ついていけばなんもされねーよ。」

歩美「で、でも」

コナン「肩かしてくれればあるけっから。げんた、肩かしてくんねーか？」

コナンはつくり笑いをしながらいった。

光彦「く、車にのればいいんですね・・・？」

ジン「・・・ああ・・・」

光彦「じゃあ僕たちものります。それでいいですか？」

歩美「そうよ！あたしたちコナン君の友達だもん！」

げんた「そーだぞ！」

ウォッカ「ならはやくのれ！」

ウォッカがそういうと歩美達はぞろぞろとポルシェにのった。

さっきまではふるえがとまらなかった哀も、覚悟を気め、車内にはいっていった。

その後コナンもウォッカに無理やり体をおこさせられ、車の中にほ織り込まれた。

はじまちゃったね・・・（後書き）

しゃくしぇんなにょだぁ♪（前書き）

ｘｘｘきすまーく♪

しゃくしぇんなにょだぁ♪

コナン達をのせたポルシェは今、どこかの車庫で停車していた。

光彦「大丈夫ですか・・・？コナン君・・・？」

コナン「あぁ・・・。これくらい、ハァッしにやしねーよ、ハァッ」

哀「まるわかりよ。無理してるって。」

コナン「とにかく、今やつらがいねえすきに、どうにかしなくちゃならねえけど・・・」

コナンはそれからおおきくため息をついて自分の体をみおろした。

その小さな体はロープで手足をきつく固定されていた。

もちろん他のメンバーも。

歩美「あたし達、死んじゃうのかなあ・・・」

哀「今はまだ大丈夫よ。」

歩美「え？」

哀「江戸川君を殺さずつれてきた理由はひとつ。ＡＰＴＸ４８６９の大事な服用者だから。おそらく、江戸川君のデータなどを利用して私に完璧なＡＰＴＸ４８６９をつくらせるのがねらいだろーから。完成するまではあなた達は江戸川君と私が抵抗しないための保険。だから薬ができるまで大丈夫よ。あとは私がなるべく研究を遅くするから。あとは江戸川君がたえられるかどうかね。」

光彦「ＡＰＴＸ４８６９？」

げんた「なあんだそれ？」

歩美「コナン君がその薬を飲んだ？」

コナン「事情はあとで説明するよ。問題は脱出方。さいわい武器はあっから、奴等のめをぬすんでどうにかしてやるよ。」

光彦「わかりました！」

歩美「コナン君もよく分かんないけどがんばってね！」

げんた「たのんだぞ！」

コナン「ああ！」

哀「ジン達がもどってきたわ！」

しゃくしぇんなにょだぁ♪（後書き）

X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X

寝ちゃったらいやだ（前書き）

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ

寝ちゃったらいやだ

光彦「とりあえずコナン君。応急処置するんで動かないでください。」

コナン「ああ。でもおめー包帯なんてもってんのか？」

光彦「大丈夫です！前にコナン君がおしえてくれたでしょう！タオルの。」

コナン「ああ、あれか。おぼえてたのか」

光彦「はい！あれからはさみとタオル、いつでももちあるようにしてたんです！」

そういうと光彦はコナンの足の撃たれたところを包帯でまいた。

光彦「できました！これでなんとか、歩くことぐらいはできます！」

コナン「サンきゅ・・・光彦」

光彦「いえ」

そのとき車が停車した。

古びたくらい山奥の屋敷だ。

どうやらここが目的地とみて間違いないだろう。

ウォッカ「おりろ。」

そういうとウォッカがドアをあけた。

ジンはすたすたと屋敷にはいっていった。

哀「なんだか薄気味の悪いところね・・・」

歩美「歩美、こわい・・・」

ウォッカ「ついて来い」

そういうとみんなで屋敷にはいっていった。

今は縄がほどかれていて体がらくだった。

あるいていくと、地下の実験室のようなところへやってきた。

そこにはふるぼけた長いすとパソコンと山済みの資料。小さな机とその上にあるパソコンがあった。

数人の組織の科学者らしい人物がいる。

もちろん、天井には監視カメラがあった。

科学者ａ「これが工藤新一ですか？すばらしい、あの薬、ぜひ研究したい。」

ジン「好きにしろ。ただまずボスに命じられたことをしろ。」

科学者ａ「はい。」

そういうと科学者らは部屋をでていった。

ジン「シェリーはここでａｐｔｘの完全なものをつくれ。こいつを参考にな。」

ジンはそういうとコナンの服のフードをつかんでもちあげ部屋の片隅におもいきりなげすてた。

コナン「っ・・・！」

歩美「コナン君！」

それからジンはひるんでるコナンにちかずくと、コナンの腹を思いっきり足でけった。

コナン「うっ！！」

そのままコナンは気絶してしまった。

歩美達の悲鳴がなりひびいた。

哀「江戸川くん！」

歩美「いやああ！」

光彦「こなんくん！」

げんた「コナン！」

ジンはコナンを持ち上げると長いすの上に投げ捨てるようにおいた。

ジン「じゃあな。ちゃんとつくれよ。お前らはずっと監視されてんだからな・・。」

そういうと二人はしずかに立ち去った。

二人がいなくなったのを確認すると４人はコナンにかけよった。

歩美「コナンくん～おきて～！！！」

３人はもう涙目だった。

コナンはよほど強い力でけられたのか目をさまさない。

寝ちゃったらいやだ（後書き）

Hぶふふふふふふふふふふ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4458y/

名探偵コナン最終回～蘭に俺の本当の声で本当の言葉で～

2011年11月26日23時48分発行